

## エリザベス朝散文とその後（1）：ペスト表象を中心に

著者	佐野 隆弥
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	62
ページ	43-59
発行年	2012-10-31
その他のタイトル	The Development of Elizabethan Prose Writing with Particular References to Representations of the Plague
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/118300">http://hdl.handle.net/2241/118300</a>

## エリザベス朝散文とその後(1)

——ペスト表象を中心に——

佐野 隆 弥

### 0. はじめに

16世紀後半から18世紀初頭のおよそ1世紀半にわたる散文の変遷を概観する際、考慮すべき要素群の一つに写実性と規範性の問題が存在する。叙述のモードが、韻文から散文へ、そして散文の中にあっては（教訓の伝達を主目的とする）規範的なものから写実的なものへと変遷してきたと指摘することは、一般論としては正しいと考えられる。しかし、このことは、韻文から写実的な散文への展開が、歴史の進展に即応した進化論的なものであったことを意味する訳ではない。そのことを確認するために一例をあげてみよう。例えば、Giovanni Boccaccioの*Decameron*（1348-53頃）。William Painterなどの英語訳によりShakespeareにも素材を提供したこのイタリアのノヴェラは、10人の人物たちの物語の集集体という体裁を取るが、彼等を集合させた要因がペストの猖獗であったことはよく知られている。このノヴェラにおける疾患の描写は、しかしながら、ペストの猛威とそれが人々に与える恐怖が主眼であり、ペストに関する客観的・分析的な記述はほとんど存在しない。その一方で、時間的には1700年以上も過去の、Thucydidesの*Historiae*には、ペロポネソス戦争中のアテナイを襲った感染症の詳細な記録が残されている。疫学的見地からの感染者数の報告や感染拡大の様子、疫病の症状や発症の様態、そして病理学的・臨床的見地からの原因究明や治療法の試みなど、その当時考えられる限りの科学的な対処が客観的に書き記されているのである。つまり、時間的な前後関係と写実性の比重の増大とは一致しないということである。

もちろんこうした比較が、叙述のモードに影響を与える様々な要因——ノヴェラと歴史書というジャンルの相違、感染症の原因を神の怒りへとすり替えるような、キリスト教的規範の有無等々——を無視した乱暴な議論であることは言うまでもない。だが、このことは逆に、類似のジャンルにおける同系統の情報の処理に分析の焦点をしぼった場合、時代の変化と規範的な力の強弱に応

じて、叙述のモードがどのような変化をたどったのかを考察することが、散文のモードの様態をも明らかにすることを、意味してもいる。本論は以上のような前提から、ペストに関する報告や作品を複数取り上げ、その記述の分析を通して、1580年代から1720年代までの散文の写実的記述の相の解明を試みるものである。また、その際の焦点は、個別の記述における特徴やスタイルの分析よりはむしろ、そうした記述を書き手にさせた言説や書き手を取り巻く思考環境にあることも追記しておきたい。散文の時間的展開を追跡する本論にあっては、個別の記述の特異性よりも、書き手に作用した知的環境の影響力を探求する方が重要だと考えるからである。

そこで議論の出発点として、大学才人の1人 Thomas Lodge の *A Treatise of the Plague* (1603) と Thomas Dekker の *The Wonderful Year 1603* (1603) を取り上げ、それらを Daniel Defoe の *A Journal of the Plague Year* および *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body* (共に1722) と比較させることで、両者の間に横たわる1世紀間に生じた規範性と写実性の相剋の実態を探りたい(従って、本論では、「規範」という用語を道徳的な意味のみならず、書き手の叙述を規定するもの、という広い意味で使用する)。

## 1. Thomas Lodge, *A Treatise of the Plague*

おそらく Lodge は、Robert Greene と並んで、エリザベス朝の文人の中でも、最も多面的な活動をした人物の1人として評価されるべき存在である。劇作家としての仕事以外にも、John Lyly の影響を受けた *Rosalyn* (1590) や、歴史的ロマンスの *A Margarite of America* (1596)、さらにはピカレスク的な *The Life and Death of William Long Beard* (1593) などの各種の散文フィクション、また Stephen Gosson への反論の演劇論である *A Defence of Play* (1580) 等多彩な作品を残している。しかし、上記のような文学的業績以外にも、Lodge には医師としての活動もあり、*A Treatise of the Plague* はその方面を代表する仕事である。従って、Lodge の散文面での正確な評価には彼の残した作品の総合的な検証が必要であるが、残念なことに、2011年の春に刊行された大学才人に関する代表的先行研究の集注版である *The University Wits* の Lodge の巻にも、このルポルタージュのエントリィは存在しない。<sup>1</sup>

*A Treatise of the Plague* は全17章で構成され、その編成および内容は概して観察と研究に基づいた科学的なものとなっている。いくつかの章のタ

イトルと具体的記述から、そのことを確認しておこう。例えば、第2章“Of the causes of the Plague”ではペストの原因に関して、第3章“Of the signes of the Plague, both impendent and present, with the good and evil signes appearing in pestiferous sicknesses”では症状や徴候に関して、また第8章“The order and policy that ought to be held in a City, during the plague time, and wherein the Lord Mayor and Sherifs, and such as under them have care of the infected, ought to shew their diligence in the maintenance and order of their cittizens”では公衆衛生について、そして第12章“Rules as touching bloud-letting, the potions and Evacuations which are necessary for him that is sicke of the plague”では外科的療法について、記述がなされている。<sup>2</sup>

次に内容面に関してだが、重篤な発作時の対応を述べた第15章の冒頭から具体的記述を引いてみる。

The most troublesome and dangerous accidents in this sicknesse, are weakenesse of vertue, faintings of the heart, soundings, raving, or frensie, extreame drith, profound sleepe, or continuall waking, crampes, coldnesse of the extreame parts, which we ought diversly to correct, according as the nature of each of them requireth.<sup>3</sup>

心機能やヴァイタル・サインの低下、譫妄、昏睡、痙攣など危篤時の症状が正確に述べられていることが見て取れ、それなりの科学的記述がなされていると言つてよい。

しかしその一方で、Lodgeは、彼の活動した時代の限界をもまざまざと見せてくれる。感染回避の指示を記した第4章の冒頭から引用する。

WHen as (by the will of GOD) the contagion of the Plague is gotten into any place, Citie, or Countrey; we ought to have an especial regard of the generall good, and by all meanes to study for their preservation who are in health, least they fall into such inconveniencie. First of all, therefore it behooveth every man to have speciall care that he frequent not any places or persons infected, neither that hee suffer such to breath upon him: but as GALEN hath learnedly advised, . . .<sup>4</sup>

この一節は、Lodge に作用していた二つの規範的な力を明示していて、示唆的である。Lodge は、上記の引用に限らず、*A Treatise of the Plague* の至る所で、依拠すべき典拠として Galenos (=Galen) に言及する。2 世紀の古代ローマで活躍し、体液病理説を体系化した医学の祖として、18 世紀頃まで絶対的な影響力を行使した Galenos の体液理論は、Lodge においても根強く信奉されていて、空気感染に警鐘を鳴らす Lodge は、明らかに、瘴気などの人体に有害な環境が病気を引き起こすというミアズマ説に基づいた記述を行っているのである。では、もう一つのそしてより強大な規範的な力とは何か。それは、“(by the will of GOD)” という形でさり気なく提示されたキリスト教的影響力——上記引用の文脈に即して言えば、ペスト感染の伝播を左右する力——なのである。疫病の出来＝神の怒りの発現、といった連想はさすがに影を潜め、あからさまな説教的教訓こそないが、それでも神の摂理が人間界の公衆衛生と疾病流行を統御するとの観念は顕著である。第 6 章と第 9 章の冒頭の一節でさらに確認しておこう。

THE Divine providence of God, being carefull for his creatures, and the preservation of mankind, hath produced many remedies to repress and prevent the daungerous insultes and assaults of y<sup>e</sup> Plague, or any other venemous contagion whatsoever.<sup>5</sup>

THat which is most necessary in great Citties, is to have a certaine selected place, whither they may convey the sicke men in time of the plague, when God inflicteth sicknesse upon them.<sup>6</sup>

そして、Lodge におけるキリスト教的規範力が最も顕現するのは、*A Treatise of the Plague* の最終節、「疫病時にすべての人々に遵守されるべき一般的規則」(“Generall rules to bee observed by all men in the plague time”) と題された一節においてである。

FIrst must we call upon God, desiring him to defend us: secondly, but especially (when we are fasting) we ought to flie from the conversation of those that are infected: Let the wind be betweene thee and the

person that is sicke, or some perfume be kindled, or hold in thy hand some odoriferous perfume. Fly the narrow wayes and streets where are dunghils: hant no vaine assemblies of feasts, but if thy meanes be to follow HIPPOCRATES rule. *Fuge longe, cito, Tarde:* or if thou must needs stay, be temperate, advised & devout, and God shal blesse thee, to whose mercy, and thy hartly praiers I humbly commend me.<sup>7</sup>

ペスト罹患者との接触を避け、不衛生な環境を回避するよう忠告する Lodge の立ち位置は確かに科学的合理性を感じさせはするが、それ以上に Lodge は神に祈念し、神の加護と祝福を求めるよう推奨する。A *Treatise of the Plague* というテキストには、その時点で利用可能なペスト対策の科学的知見が、間違いなく十分に記載されている。しかし、この論考全体をコントロールしている言説が、神への祈願を中心とする伝統的キリスト教への帰依と、一時代昔のミアズマ説とであることも事実である。

## 2. Thomas Dekker, *The Wonderful Year 1603*

共作を中心に、1590年代精力的に劇作に従事していた Dekker は、1603年頃からパンフレットの創作にも従事し出す。*The Wonderful Year 1603* はその最初の作品と考えられていて、同年に崩御した Elizabeth I に対する追悼と、王位を襲って即位した James I に対する言祝ぎを手短かに述べた後、猛威を振るったペストに対する恐怖とロンドンの悲惨な状況を、独特の迫真性をもって描き出している。ペストの描写が始まるあたりから引用してみる。

A stiffe and freezing horror sucks up the rivers of my blood: my haire stands an ende with the panting of my braines: mine eye balls are ready to start out, being beaten with the billowes of my teares: out of my weeping pen does the inck mournefully and more bitterly than gall drop on the palefac'd paper, even when I do but thinke how the bowels of my sicke Country have bene torne, . . . lend me Art (without any counterfeit shadowing) to paint and delineate to the life the whole story of this mortall and pestiferous battaile, & you the ghosts of those more (by many) then 40000. that with the virulent poison of

infection have bene driven out of your earthly dwellings: you desolate hand-wringing widowes, that beate your bosomes over your departing husbands: you wofully distracted mothers that with disheveld haire falne into swoonds, whilst you lye kissing the insensible cold / lips of your breathlesse Infants:<sup>8</sup>

Dekker の *The Wonderful Year 1603* は、従来、その写実性の高さとそこに垣間見えるジャーナリズムの萌芽を評価されてきたが、上記の引用からも判明するように、Dekker がここで行っているのは、対象を精確に描写することではなく、(おそらくは Dekker の眼前で展開されたと考えられる) 現象が Dekker にどのような衝撃を与え、それがどのような精神的・感情的反応を生起させたかということを書き記すことである。そしてその目的を果たすために Dekker が利用している手段は、事実を比喩によって表現することで喚起される効果と、テンポよくリズムカルに描写を重ねることで生じる勢いのインパクトであり、両者が相乗的にもたらすレトリックの力であると考えられることができる。

このことを確認するために、もう少し引用してみよう。

And in this maner do the tedious minutes of the night stretch out the sorrowes of ten thousand: It is now day, let us looke forth and try what Consolation rizes with the Sun: not any, not any: for before the Iewell of the morning be fully set in silver, hundred hungry graves stand gaping, and every one of them (as at a breakfast) hath swallowed downe ten or eleven livelesse carcasses: before dinner, in the same gulfe are twice so many more devoured: and before the sun takes his rest, those numbers are doubled:<sup>9</sup>

the Plague tooke sore paines for a breach: he laid about him cruelly, ere he could get it, but at length he and his tiranous band entred: his purple colours were presently (with the sound of Bow-bell in stead of a trompet) advanced, and ioynd to the Standard of the Citie: he marcht even thorow Cheapside, and the capitall streets of *Troynovant*: the only blot of dishonor that struck upon this Invader, being this, that hee plaide the tyrant, not the conqueror, making havocke of all, when he

had all lying at the foote of his mercy. Men, women & children dropt downe before him: houses were rifled, streetes ransackt, beautifull maidens throwne on their beds, and ravisht by sicknes: rich mens Cofers broken open, and shared amongst prodigall heires and unthriftie servants: poore men usde poorely, but not pittifully; he did very much hurt, yet some say he did very much good.<sup>10</sup>

比喩に富む迂言的な表現で Dekker が描写しているものは、実は単純な事象にすぎず、それらは、前者の引用ではペストによる夥しい死者数であり、後者においてはペストの猛威と圧倒的な破壊力であって、それが暴君と彼が率いる軍勢に喩えられている。こうした描写は、メタファの点でも言い回しの点でも極めて標準的であり、斬新なものは何もないときえ言えよう。しかし、われわれが目すべきものは、先にも言及したレトリックの力を行使することで、何かをコミュニケーションしようとする（あるいは、そのふりをする）書き手 Dekker の熱意、または読者に訴えかけようとする Dekker の姿勢であり、もしこのパンフレットにジャーナリズムの萌芽を見るのなら、むしろそこにこそ認めるべきものであろう。

では、*The Wonderful Year 1603* の場合、いかなる規範的な力の作用を確認することが可能であろうか。次の引用を検証してみたい。

Never let any man aske me what became of our Phisitions in this Massacre, they hid their Synodical heads aswell as the prowdest: and I cannot blame them, for their Phlebotomies, Losinges, and Electuaries, with their Diacatholicons, Diacodions, Amulets, and Antidotes, had not so much strength to hold life and soule together, as a pot of *Pinders Ale* and a Nutmeg: their Drugs turned to durt, their simples where simple things: *Galen* could do no more good, than Sir Giles Goosecap: *Hipocrates*, *Auicen*, *Paraselsus*, *Rasis*, *Fernelius*, with all their succeeding rabble of Doctors and Water-casters, were at their wits end,  
...

Onely a band of Desper-vewes, some fewe Empiricall madcaps (for they could never be worth velvet caps) turned themselves into Bees (or more properly into Drones) and went humming up and downe,

with hony-brags in their mouthes, sucking the sweetnes of Silver (and now and then of *Aurum Potabile*) out of the poison of Blaines and Carbuncles.<sup>11</sup>

上記引用は、*The Wonderful Year 1603*の中で最も医学的・科学的(?)な記述がなされている箇所である。Hippocrates や Galenos, また各種薬剤への言及は存在するものの、Dekkerの意図はそれらの無効・無能を暴き立てることであり、ペストを前にした医者が無能をあげつらうことで、疫病の破壊力の凄まじさを逆に印象づけることである。医師である Lodge と比べて、医学とは無縁の Dekker に *A Treatise of the Plague* 的な記述を求めることは元より無理な注文ではあるが、それにしてもこの時期広く受け入れられていた体液病理説への言及がほとんど存在しないことは、このパンフレットのの一つの特徴と言ってよいであろう。Dekker にとりペストの描写とは、Galenos 的生理学という規範に基づいた分析的記述でもなければ、キリスト教的規範力を背景に教訓的説教を垂れることでもなかったのである。

その一方で Dekker らしさを確認できるのは、むしろ後段の描写である。ペストの流行を一大商機とばかりにしたたかに利潤を吸い上げる詐欺師・ペテン師達の活躍ぶりを、Dekker は巧みに活写する。こうした下層社会を社会記事的に共感を込めて、あるいは自らもその一員としての意識を持って描写するところに、Dekker の真骨頂があると考えられる。Dekker の *The Wonderful Year 1603* には、ペストを描くに当たって規範となる体液生理学もなければ、ペストを神による天罰と受け止めるキリスト教的道徳規範も顕在的な形で確認することはできなかった。Dekker のこのパンフレットを統御する力があるとなれば、それはレトリックの力を駆使することで、生々しい現実を読者に報告しようとするルポルタージュ(文字通り、報告+文学)への指向ということになるだろうか。

### 3. Daniel Defoe, *A Journal of the Plague Year* & *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body*

Defoe が *Robinson Crusoe* を出版した 1719 年の翌年、マルセイユでペスト流行との知らせがロンドンに届く。その衝撃に触発された Defoe が、1665 年のロンドンにおけるペスト猖獗に取材して、1722 年に出版したのが A

*Journal of the Plague Year* であり、その1ヶ月前に出された長編のパンフレット *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body* (以下、*Due Preparations* と略記) である。散文の展開という観点から見た時、様々な問題を喚起して興味をそそるのは後者の方だと思われるが、議論の都合一般によく知られた前者の特徴から検討を開始したい。

*Robinson Crusoe* において、Defoe の主張がある程度主人公 Crusoe に仮託されているように、*A Journal of the Plague Year* にあっても、この大災厄を生き延びた語り手 H. F. (通説では、Defoe の叔父で馬具商人の Henry Foe) の背後には明らかに Defoe が控えている。*Robinson Crusoe* の批評史を取りあえず乱暴に整理し、仮にここでは (1) *homo economicus* からの実利的意味の生成、(2) 敬虔な宗教的意味の喚起、にのみ注目したとすれば、*A Journal of the Plague Year* ではどうなるであろうか。先ず第1の側面から検証してみよう。ある意味でペストの疫学的記述である *A Journal of the Plague Year* には、数字 (=死者数) への強烈なこだわりが感じられる。通常の描写の中はもとより、リスト的なものまでも散見されるのである。もちろん、数字が列挙してあるからと言って、それだけで記述が写実的とは言えない。Defoe の場合特徴的なのは、そうした記述が、例えば経済的コンテクストにも向けて語られている点である。ペストの蔓延によるロンドン経済への打撃を語る次の一節がその例となる。

Our Merchants accordingly were at a full Stop, their Ships could go no where, that is to say to no place abroad; their Manufactures and Merchandise, that is to say, of our Growth, would not be touch'd abroad; they were as much afraid of our Goods, as they were of our People; and indeed they had reason, for our woolen Manufactures are as retentive of Infection as human Bodies, and if pack'd up by Persons infected would receive the Infection, and be as dangerous to touch, as a Man would be that was infected; and therefore when any *English Vessel* arriv'd in Foreign Countries, if they did take the Goods on Shore, they always caused the Bales to be opened and air'd in Places appointed for that Purpose: But from *London* they would not suffer them to come into Port, much less to unlade their Goods upon any Terms whatever; and this Strictness was especially us'd with them in *Spain* and *Italy*.<sup>12</sup>

第2の宗教性に関しては、例えば Charles Gildon が *The Life and Strange Surprising Adventures of Mr. D...DeF...of London* (1719) で、*Robinson Crusoe* における神の撰理の乱発を厳しく揶揄したように、また *Robinson Crusoe* の第3部 *Serious Reflections* (1720) の中で宗教的側面が前面に打ち出されているように、*Robinson Crusoe* 自体には、人間に訪れる事象と撰理との関わり合いについての考察が顕著である。ところが、*A Journal of the Plague Year* の場合、予想に反して撰理への言及は寡少である。ペスト来襲のパニックの最中、市民等が超自然的な言説に惑わされる箇所を除けば、撰理的なものへの顕著な言及は、ペスト猖獗の兆候の中で主人公が避難すべきかどうか決めかねている時に、偶然『詩篇』の一節を目にし決心がつく部分と、作品の大詰め、ようやくペスト終息が見えた際に主人公が述べる次の感懐にすぎない。この点に関しては、*Due Preparations* との関連で後ほど考えてみたい。

Nothing but the immediate Finger of God, nothing but omnipotent Power could have done it; the Contagion despised all Medicine, Death rag'd in every Corner; and had it gone on as it did then, a few Weeks more would have clear'd the Town of all, and every thing that had a Soul: . . .

In that very Moment, when we might very well say, Vain was the Help of Man; I say in that very Moment it pleased God, with a most agreeable Surprize, to cause the Fury of it to abate, . . .<sup>13</sup>

では、Lodge の思考を規定していたミアズマ説は、Defoe ではどうなったのか。William Harvey が 1628 年に刊行した *Exercitatio anatomica de motu cordis et sanguinis in animalibus* (『諸動物における心臓と血液の動きに関する解剖学的研究』) により、動脈と静脈が一つの循環器を形成していることを解明したことで、古代ギリシア以来西洋生理学を支配してきた体液病理説は否定された。しかし、Copernicus の地動説を持ち出すまでもなく、旧来の学説は新知見としばらくは共存する。次の引用を見てみよう。

This put it out of Question to me, that the Calamity was spread by Infection, that is to say, by some certain Steams, or Fumes, which

the Physicians call *Effluvia*, by the Breath, or by the Sweat, or by the Stench of the Sores of the sick Persons, or some other way, perhaps, beyond even the Reach of the Physicians themselves, which *Effluvia* affected the Sound, who come within certain Distances of the Sick, immediately penetrating the Vital Parts of the said sound Persons, . . .<sup>14</sup>

大氣中に漂う有害物質の吸引による発症という旧来の病理説は温存されているものの、ここには罹患者への接近という項目への注目が存在し、infection から contagion (接触感染) への感染様態理解の移行が感じられる。さらに公衆衛生の観点からも、Defoeは、ロンドン市長並びに参事会による疫病対策令を項目毎に記載し、対策に当たる各種マンパワー、発病の告知義務、患者の隔離、消毒、家屋の閉鎖、死者の埋葬、汚染衣類の処理、ペスト発生家屋の監視などについて記述している。また、こうした感染症対策は、James I時代のそれを改善したものであることが述べられ、ここにも Lodge との時代格的差を見出すことは可能である。こうした一連の描写を通して感じられることは、*A Journal of the Plague Year*における、事実に基づくことを装う方向性であり、それらが生み出す迫真性ということになる。

だが、この作品は、ただ単に事実への近接を図った報告書という訳ではない。*A Journal of the Plague Year*には、Dekker 的世界への親近性も存在するのである。

and as I have said before, that they ran to Conjurers and Witches, and all Sorts of Deceivers, to know what should become of them; who fed their Fears, and kept them always alarm'd, and awake, on purpose to delude them, and pick their Pockets: So, they were as mad, upon their running after Quacks, and Mountebanks, and every practising old Woman, for Medicines and Remedies:<sup>15</sup>

*The Wonderful Year 1603* 同様の、詐欺師・ペテン師達によるあくどい商魂を描いた上記の引用だが、Dekkerの描写が下層社会をある種共感を込めて、あるいは自らもその一員としての意識をもって描き出していたのに対して、Defoeのものには対象を客体化し、対象と距離を置いた上で記述しようとする、作者の折り合いの付け方が感じられる。Dekkerが自身と同時代の出来事を描

写し、*A Journal of the Plague Year*の方は回想モードを使用するという相違はあるものの、生々しさを売りにする Dekker に対し、後者は時間的な間隔を置いた記述が産生する迫真性が与えるインパクトが作品の重要な魅力となっている。

では次に、*Due Preparations* に関して検証してみたい。一般に、「実利的な意図」をもって書かれたとされる *Due Preparations* だが、果たして実態はどうであろうか。*A Journal of the Plague Year* と同じく、フランスにおけるペスト発生の報に接して執筆された *Due Preparations* の冒頭で、Defoe は次のように作品の意図と構成を述べている。

I divide my subject into two generals:—

1. Preparations against the Plague.

2. Preparations for the Plague.

The first of these I call preparations for the body.

The second I call preparations for the soul.

Both, I hope, may be useful for both, and especially the first shall be subservient to the last.<sup>16</sup>

タイトルにも示された通り、Defoe の重心は魂の方にあるようだが、具体的にはどうなっているのか。J. M. Dent & Co. 版 (1895) で、総計 175 ページ中、前半部には約 82 ページ割かれているが、ペストの拡散や疾患としての特徴、公的機関の取るべき対処法など正に一連の実利的な記述が続いた後、“Family Preparations against the Plague” というセクションが現れる（このこと自体は、やはり冒頭で、Defoe が “Particular Preparations, such as relate to persons and families for preserving us from infection in our houses,” と予告している）。<sup>17</sup> 3 ページ程記述が進んだところで、興味深いことに、Defoe は 1665 年のペスト災からの事例と称して、セントオールバンズ教区に居住するある一家の避難物語を描写し出す。この描写は 30 ページばかり継続するのであるが、重要なのは *A Journal of the Plague Year* とは違って、3 人称が主語に立てられ描写が進行してゆくことである。ある種、短編小説を読まされるかの如きこの仕掛けの目的と意図各々に関して、Defoe は、この描写が一段落ついた箇所と、*Due Preparations* に付されたイントロダクションにおいて、以

下のように語っている。

The whole scheme of my discourse, therefore, aims at separating the people as much as possible from one another, and on this depends their safety and health; I mean as to second causes, and the means of preserving it.<sup>18</sup>

To make this discourse familiar and agreeable to every reader, I have endeavoured to make it as historical as I could, and have therefore intermingled it with some accounts of fact, where I could come at them, and some by report, suited to and calculated for the moral, endeavouring by all possible and just methods to encourage the great work of preparation, which is the main end of this undertaking.<sup>19</sup>

感染地あるいは感染者からの隔離を主張する意図を持って書かれた、この一家の物語だが、公衆衛生上の一般的な対策を生彩に富む物語的描写で敷衍することにより、確かに「読者に親しみやすくする」効果を上げると同時に、描写自体のフィクション性を感知させる効果も生じさせてはいないだろうか。そして、1人称で語り通した *A Journal of the Plague Year* が維持していた事実譚としての一貫性の、綻びあるいは新たな語りの可能性を指し示しているようにも思われる。

さて、後半部だが、ここではほぼ最初から最後まで約 90 ページにわたって、前半部以上に特異な構成と展開が用意されている。シティに居住する未亡人の敬虔な母親と、やはり信仰心篤い 19 歳の娘、そしてその 2 人の兄 (40 歳と 26 歳、共に商人) との間の会話で全編占められており、一連の会話が終了する度に、1 人称の「私」が短くコメントを介入させるという構成である。彼等の会話の主題は、人間界の事象と神の摂理や審判をめぐるものであり、やがてペストの蔓延と共にこの災厄と神の振る舞いとの問題に移行してゆく。一例を引いてみよう。

*Brother.* But what do you look upon to be the first work?

*Sister.* The first thing I can think of is a full resolution, a firm purpose of heart, to forsake all our sins, and to return heartily to God,

who we have offended.

*Brother*. By returning to God I suppose you understand repenting sincerely for all our past sins, mourning unfeignedly over them, and calling upon God for pardon and forgiveness.<sup>20</sup>

そしてこの後半部の結論は、“preparations”の重要性を説く、本作品の最後の一節で明瞭に示される。

And thus stood the difference between the prepared and the unprepared; let us choose for ourselves! God grant that every sincere Christian may have his eyes up to Him in all such cases, and prepare his mind by a sincere repentance for all their sins, and a resolved and steady giving themselves up to the Divine disposal; then they shall experience that happy truth, that “he shall not be afraid of evil tidings, whose heart is fixed, trusting in the Lord.”<sup>21</sup>

*Robinson Crusoe* が全3部を通して理解されるべきものであるとするならば、*A Journal of the Plague Year* も *Due Preparations* と一体の下に読まれるべきものであり、1ヶ月の間隔で両著を刊行した Defoe の意図もおそらくはそのあたりにあるだろう。そして *Robinson Crusoe* に見られた神の摂理への執拗な言及は、やはり同様にこのペストものにも、規範的な力として確実に作用しているのである。

## 注

\*本論は、平成23～25年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））「エリザベス朝演劇文化の誕生に作用した大学才人と英国国教会の接触に関する動態的研究」（課題番号23520282）の成果の一部である。

- 1 Robert A. Logan, series ed., *The University Wits*, 6 vols. (Farnham: Ashgate, 2011).
- 2 *A Treatise of the Plague* からの引用は、*The Complete Works of Thomas Lodge*, Vol. 4 (New York: Russell and Russell, 1963) に拠る。
- 3 Lodge, *A Treatise of the Plague*, 76.
- 4 Lodge, *A Treatise of the Plague*, 22.
- 5 Lodge, *A Treatise of the Plague*, 27.
- 6 Lodge, *A Treatise of the Plague*, 49.

- 7 Lodge, *A Treatise of the Plague*, 85-86.
- 8 G. B. Harrison, ed., *Thomas Dekker: The Wonderfull Yeare 1603* (Edinburgh: Edinburgh UP, 1966) 36-37.
- 9 Dekker, *The Wonderfull Yeare 1603*, 40.
- 10 Dekker, *The Wonderfull Yeare 1603*, 46-47.
- 11 Dekker, *The Wonderfull Yeare 1603*, 51-53.
- 12 Louis Landa, ed., *A Journal of the Plague Year: Being Observations or Memorials of the Most Remarkable Occurrences, as well Publick as Private, Which Happened in London during the Last Great Visitation in 1665* (London: Oxford UP, 1969) 213.
- 13 Defoe, *A Journal of the Plague Year*, 244-45.
- 14 Defoe, *A Journal of the Plague Year*, 74.
- 15 Defoe, *A Journal of the Plague Year*, 30.
- 16 George A. Aitken, ed., *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body* (London: J. M. Dent, 1895) 9.
- 17 Defoe, *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body*, 9.
- 18 Defoe, *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body*, 81.
- 19 Defoe, *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body*, 6.
- 20 Defoe, *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body*, 137.
- 21 Defoe, *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body*, 183.

## 参考文献

- Bacon, Francis. *The Works of Francis Bacon, Baron of Verulam, Viscount St. Alban, and Lord High Chancellor of England*. Ed. James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath. Vol. 2, Philosophical Works Vol. 2. London: Longmans & Co., 1876. Print.
- Cavendish, Margaret. *The Blazing World and Other Writings*. Ed. Kate Lilley. Harmondsworth: Penguin, 1992. Print.
- . *Observations upon Experimental Philosophy*. Ed. Eileen O'Neill. Cambridge: Cambridge UP, 2001. Print.
- Defoe, Daniel. *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body*. Ed. George A. Aitken. London: J. M. Dent, 1895. Print.
- . *A Journal of the Plague Year: Being Observations or Memorials of the Most Remarkable Occurrences, as well Publick as Private, Which Happened in London during the Last Great Visitation in 1665*. Ed. Louis Landa. London: Oxford UP, 1969. Print.
- . *Robinson Crusoe*. Ed. John Richetti. London: Penguin, 2001. Print.
- Dekker, Thomas. *Thomas Dekker: The Wonderfull Yeare 1603*. Ed. G. B. Harrison. Edinburgh: Edinburgh UP, 1966. Print.
- Lodge, Thomas. *The Complete Works of Thomas Lodge*. Vol. 4. New York: Russell and Russell, 1963. Print.

- Sprat, Thomas. *The History of the Royal Society*. Ed. Jackson I. Cope and Harold Whitmore Jones. London: Routledge and Kegan Paul, 1958. Print.
- Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. Ed. Claude Rawson. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.
- Barbour, Reid. *Deciphering Elizabethan Fiction*. Newark: U of Delaware P, 1993. Print.
- Clark, Sandra. *The Elizabethan Pamphleteers: Popular Moralistic Pamphlets 1580-1640*. Rutherford, NJ: Fairleigh Dickinson UP, 1983. Print.
- Davis, Lennard J. *Factual Fictions: The Origins of the English Novel*. New York: Columbia UP, 1983. Print.
- Davis, Walter R. *Idea and Act in Elizabethan Fiction*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1969. Print.
- Helgerson, Richard. *The Elizabethan Prodigals*. Berkeley: U of California P, 1976. Print.
- . *Forms of Nationhood: The Elizabethan Writing of England*. Chicago: U of Chicago P, 1992. Print.
- Hodges, Devon L. *Renaissance Fictions of Anatomy*. Amherst: U of Massachusetts P, 1985. Print.
- Jones, Richard F. *The Triumph of the English Language: A Survey of Opinions Concerning the Vernacular from the Introduction of Printing to the Restoration*. London: Oxford UP, 1953. Print.
- Keller, Evelyn Fox. *Reflections on Gender and Science*. New Haven: Yale UP, 1985. Print.
- Kinney, Arthur F. *Humanist Poetics: Thought, Rhetoric, and Fiction in Sixteenth-Century England*. Amherst: U of Massachusetts P, 1986. Print.
- Krapp, G. Philip. *The Rise of English Literary Prose*. New York: Oxford UP, 1915. Print.
- Logan, G. M. and Gordon Teskey, eds. *Unfolded Tales: Essays on Renaissance Romance*. Ithaca: Cornell UP, 1989. Print.
- Logan, Robert A., series ed. *The University Wits*. 6 vols. Farnham: Ashgate, 2011. Print.
- Margolies, David. *Novel and Society in Elizabethan England*. London: Croom Helm, 1985. Print.
- Mueller, Janel M. *The Native Tongue and the Word: Developments in English Prose Style, 1380-1580*. Chicago: U of Chicago P, 1984. Print.
- Newcomb, Lori H. *Reading Popular Romance in Early Modern England*. New York: Columbia UP, 2002. Print.
- Relihan, Constance C. *Fashioning Authority: The Development of Elizabethan Novelistic Discourse*. Kent, OH: Kent State UP, 1994. Print.
- Salzman, Paul. *English Prose Fiction, 1558-1700: A Critical History*. Oxford: Clarendon P, 1985. Print.

- Schlauch, Margaret. *Antecedents of the English Novel 1400-1600: From Chaucer To Deloney*. London: Oxford UP, 1963. Print.
- Totaro, Rebecca, ed. *The Plague in Print: Essential Elizabethan Sources, 1558-1603*. Pittsburgh, PA: Duquesne UP, 2010. Print.
- and Ernest B. Gilman, eds. *Representing the Plague in Early Modern England*. New York: Routledge, 2011. Print.
- . *Suffering in Paradise: The Bubonic Plague in English Literature from More to Milton*. Pittsburgh, PA: Duquesne UP, 2005. Print.